

ポラリスを仰ぐ北の大地から

医師会附属准看護学院の 50年目の終焉

上川北部医師会 会長 坂田 仁

上川北部医師会は旭川以北、和寒町から中川町まで南北140km、東西55kmの広い地域に2市5町1村をカバーしています。そして、名寄市立総合病院、士別市立病院をはじめとして8病院22診療所が所属しています。現在、そのほとんどの病医院で私どもの学院卒業生が働き、地域医療に貢献しています。

昭和44年頃、上川北部地域の開業医には看護婦有資格者が少なく、看護助手に頼らなければならない状況でした。その看護助手たちに働きながら学び、准看護婦の資格を取得させ、看護の質の向上を図るために名寄市の開業医15名が出資し、准看護婦養成所を設立する運びとなりました。

当時、道内にはいくつかの医師会附属准看護婦養成所が開設されていて、その実状について調査・研究の後、昭和45年4月に本学院が開学することになりました。開学当初より夜学で、学生達はほとんどが医療機関に所属し、日中は看護助手として勤務していました。しかし、医療・看護教育の進歩によるカリキュラムの変更で平成12年に全日制となり、学業だけに専念する学生が増えました。また、受験生の減少に加えて、8割を超えていた地元出身者が最終年度は2名にまで減ってしまいました。多くの学生が進学するようになり、地元で准看護師として残る者も減少し、学院の役割も果たせなくなりました。

本学院はこの3月7日に卒業した5名を含めて948名の卒業生を、上川北部はもちろんのこと、全道に優秀な准看護師として輩出してきました。また、卒業後に進学して看護師の資格を取得し、公的病院に勤務している者も少なくありません。このように地域医療に大きく貢献してきた本学院が令和元年度、50年の節目の年に看護教育を終了したことは、痛恨の極みです。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、最後の卒業式、閉校式は縮小され、200名を越える卒業生の参加が予定されていた閉校記念パーティも自粛となり寂しく悲しい結末となりました。

病院の治しかた

留萌医師会 会長 角 隆巨

この冬「病院の治しかた」という連続ドラマが放送されておりました。病院経営に悩む若き院長が病院スタッフのさまざまな要望を聞き、患者さんの為になるにはどうすれば良いか、さらに多くの患者を守っていきたくと奮闘する物語です。現実とは少々乖離があるでしょうが共通点もあり、人材確保・資金投入の事象など、そこに経営責任を背負っているトップの理念と将来のビジョンが強く必要になります。

当然一人で成し遂げられる訳でもなく、そこに「使っているだけのスタッフ」という意識を少しでも持っていないと「ついていけない」とスタッフの心が離れてしまいます。志高くビジョンを成し遂げようとする為に共に力を注ぎ続けられる「同志たるスタッフ」という考え方が常に必要だと思うのです。問題があれば自力で解決できるスタッフもいますが、各所の調整が必要になる問題も発生します。その連携を個人に任せっきりにすると問題がこじれることもあり、日々起きるさまざまな問題は、積極的に調整役に回れるのが「長」たる役職に就く者の役目ですが、正しく判断と決断する為の理念は二つあると考えます。それは「スタッフに興味を持つこと」と「この決定は結果的に患者さんの為に繋がるのか」ということです。私自身も常に判断と決断を繰り返しながら、人間誰しも完璧ではないことを自覚し、完璧ではないから周りに頼ること、そして任せることも重要です。

自分との考え方の相違でぶつかることもあります。そこで重要なのは「裁くことではなく、許すこと」、許してばかりでは現場が緩んでしまうと思われるかもしれませんが、自己完結型の責任を全うするスタッフが全力で行った結果の間違ひには「許すこと」が大切です。そして自己完結型の責任を全うするスタッフを育成するのは常に経営者側の責任と思って日々取り組んでおります。

